研究・調査報告書

分類番号		報告書番号	担当
A-310		21-085	滋賀医科大学社会医学講座公衆衛生学部門　三浦克之

題名（原題／訳）

A Dose-Response Relationship of Alcohol Consumption with Risk of Visual Impairment in Korean Adults: The Kangbuk Samsung Health Study

韓国成人における飲酒と視覚障害リスクとの用量反応関係：江北三星健康調査

執筆者

Han SY, Chang Y, Kim Y, Choi CY, Ryu S.

掲載誌

Nutrients. 2022 Feb 14;14(4):791. doi: 10.3390/nu14040791.

キーワード	PMID
アルコール、コホート研究、視覚障害、視力低下	35215441

要　旨

目的：視覚障害は QOL の低下、怪我、うつ病と関連する高齢化社会における重要な公衆衛生上の問題である。本研究では、健康診断を繰り返し受診する韓国成人を対象とした大規模コホートにおいて、追跡期間中の飲酒状況や他の交絡因子について時間依存的な変化を評価しつつ、飲酒や飲酒パターンと視覚障害発症との関連を縦断的に検討した。

方法：韓国成人のコホート研究（江北三星健康調査）のサブサンプルを使用した。2011 年 3 月から 2017 年 12 月までに視力検査を含む健康診断に参加し、2019 年 12 月 31 日までに少なくとも 1 回のフォローアップ視力検査を受けた 336,262 人を最大 8.8(中央値 4.9)年追跡し、最終 287,352 人を分析対象とした。飲酒習慣やその他の健康習慣、病歴に関する情報等は、標準化された自己報告式の質問票を用いて各診察時に評価した。参加者を平均飲酒量に基づいて分類した。視覚障害は、両側視力が、logMAR 検査で 0.3 より悪い場合と定義した。

結果：両側性の視覚障害の新規発症は 8,320 例(発症率 6.0/1000 人年)であった。飲酒量の増加は、視覚障害発症率の上昇と正の相関があり、用量依存的であった（Ptrend < 0.001）。生涯非飲酒を基準とした場合、飲酒量が 1 日 10g 未満、10～20g 未満、20～39.9g 未満、40g 以上の場合の視覚障害発症の多変量調整ハザード比(HRs,(95%信頼区間(CI))はそれぞれ 1.07(0.96-1.19)、1.15(1.03-1.30)、1.15(1.01-1.30)および 1.23(1.08-1.40)だった。頻繁な大量飲酒（1 回/週）は、視覚障害リスクの上昇と関連していた(HRs,1.22;95%CI:1.13-1.32)。過去飲酒者の視覚障害発症リスクは、特に男性において非飲酒者よりも高く、飲酒量の変化や他の交絡因子を時間依存性共変量として評価しても、同様の関連が観察された。

結論：飲酒は、適度であっても過剰であっても視覚障害発症率の上昇と関連し、飲酒量、大量飲酒および大量飲酒の頻度と有意に関連していた。視覚障害発症リスクの減少と眼の健康負担を軽減するためには大量飲酒を控えることが重要である。